

## 第2編 現地視察

### 第1章 龍勢まつり見学会

#### (1) 概要

- ・日時：平成19年10月14日(土)
- ・視察箇所：寄居玉淀川原(水天宮祭箇所) 龍勢会館、龍勢まつり会場(棕神社)
- ・目的：「川と水にかかわるまつり」調査研究の一環として、寄居・秩父地方のまつりを実際に見学することにより、地域への理解を深め、調査研究の一層の進展を図る。
- ・現地視察行程：  
熊谷駅南口 R140 寄居玉淀川原 皆野寄居 BP 戦場インター  
龍勢会館 龍勢まつり会場(棕神社) 皆野寄居 BP R140 熊谷駅解散

今回の見学会は10月中旬の気候のよい時期に近藤・中村両顧問をはじめ、28名の出席のもと盛大に行われた。一行は9時に熊谷駅南口に集合し、9時15分に岡部幹事手配の秩父鉄道KKの大型バスで目的地に向け出発した。車中白倉幹事の司会の挨拶から始まり、続いて小林会長から挨拶と現在調査中の三郷市香取・浅間神社の「刀懸り」の披露があり、その後岡部幹事の行程説明があった。



秩父鉄道観光の大型バスなかなか快適。添乗員は若きエース桜澤君、120kgの巨体でお世話いただきご苦労さん

#### (2) 寄居玉淀川原(水天宮祭箇所)

バスは寄居の街中を過ぎ、景勝地であり対岸に鉢形城跡を望む玉淀河原に到着。寄居町観光協会の中島さんから、漁師の水難除け・安産子育てを祈願する「寄居天宮祭」の歴史、現在における祭りの意義、祭りの模様などをお話しいただいた。



玉淀川原で寄居町観光協会の中島さんから「水天宮祭」について聞く

荒川玉淀の下流に古代から石宮があり地元の漁師が水難除けに「水神様」を祀った。また、この石宮のそばに「ご神木」があり、その昔荒

川の増水で流された身重の婦人がこの神木に掴まって助かり無事出産できたという言い伝えから、水難よけ・安産子育て」として信仰を集めた。

その後地元有志が社殿を造営して、日本橋の水天宮を遷宮した。「寄居水天宮」が鎮座し、石宮を奥の院とした。昭和6年に天然の景勝地「玉淀」として県の指定を受けたことから町観光協会の前身である玉淀保勝会は水天宮祭の付け祭として花火大会を開催し、以後舟山車・灯籠流しと相まって「関東一の水祭」と言われる様になった。

今年の「寄居玉淀水天宮祭」は8月4日(土)に開催された。



玉淀川原から正喜橋を望む  
右手の山中に鉢形城址

### (3) 龍勢まつり会場(椋神社)

バスは皆野町中を通過し、旧吉田町の里山風景を楽しみながら、予定より40分早い11時に龍勢会館に到着した。渋滞もなく、思ったよりスムーズに走れた。



龍勢会館  
龍勢の歴史、構造等を学ぶ

龍勢会館前で、道路は祭りのため進入禁止。会館で祭りの歴史・龍勢の実物展示・製作手順等を学ぶ。昼食の弁当等を配付し、徒歩で10分程度、あらかじめ田中幹事が手配してくれた龍勢祭り会場の栈敷席に着く。



升席による懇親風景

地元にお住まいで祭りに参加している秩父県土整備事務所の荒舟さんがゴザを用意し、加えて彩の川研究会の名入りの地酒とおでんの差し入れまでして頂き、おかげで参加者皆盛り上がり祭りを楽しめました・感謝・感謝。

この祭りの起源は、享保10年の椋神社縁起である「椋五所大明神由来」によると、「日本武尊が持った鉾が光を発したことから、後世氏子が椋神社前方の吉田川原で祭日に大火を焚き、そのもえさしを投げ、光を放って神を慰め奉ったが、火薬が普及してからはこれを用いて火花を飛ばし龍勢となった。夜間見るときは星のごとく流星と書き、昼間見るときは雲中に龍の翔る如くで龍勢とも書く」とある。



秩父県土整備事務所の荒舟さん差し入れの地酒

今年タイ国修好 120 周年にあたる。ロケット祭りが縁で、秩父市とタイ国ヤソトン市は姉妹都市提携を結んでいる。この人たちによる民族色豊かなパレードが 12 時から披露された。

龍勢は高く上がり最上天で落下傘に吊られた矢柄（長い竹竿）がひらひらと水平に降りてくるものを最上とする。

今年 33 製造流派による 33 の龍勢が昇る予定だったが、14 時ごろある龍勢が途中から横に飛び、付近の人が怪我をしたとのことで中断してしまった。（家に帰ったらこの事故をテレビで放映しており 4 名怪我をしてその内の一人は 3 ヶ月の重傷とのこと）

来年以降の開催を気にしながら帰路に着く。車中で尾崎副会長の見学会参加御礼の挨拶があり。16 時ごろ熊谷駅南口に到着し解散する。



タイ国ヤソトン市民によるパレード  
民族衣装をまとった若者



龍勢の飛翔（祭のパソレットより）